

雅楽なるほど・ザ・カード

☆ 雅楽っていつ頃のどんな音楽？

雅楽とは、「雅正の楽」、つまり上品な音楽神社の結婚式などで演奏されている音楽も、雅楽のひとつです。

大和時代・奈良時代・平安時代のはじめにかけて、大陸の各地（中国や朝鮮半島）からいろいろな音楽が伝えられました。平安時代に入って、これら外来の音楽や舞踊を我が国風にあらためて、上品で優雅な音楽にしようと、天皇の監督のもとに改革が行われました。そしてその音楽を雅正の音楽とよびました。雅楽という名前は、これからおこりました。ふつう雅楽というと、中国や朝鮮などから輸入された、器楽合奏や舞踊をともなう音楽をいいます。

この改革を通して、源博雅のような作曲の天才も現われ、日本人による新しい雅楽の曲も誕生しました。平安時代中頃になると、日本で作られた歌曲である催馬楽や朗詠なども雅楽に加えられた。

雅楽は、以後ずっと朝廷や神社・寺院の音楽としてずっと保護され、現在では、「宮内庁式部職楽部」などによって保存、演奏されている。

※ 「催馬楽」・・・大衆の歌などを、貴族の生活や気持ちにあった上品な芸術歌曲につくりかえたもの

※ 「朗詠」・・・漢詩や漢文（中国の詩や中国調の文章）に節を付けてうたわれたもの

☆ 「今様」ってなに？

「今様」というのは、平安時代の末期から、鎌倉時代にかけて流行した歌謡曲のことです。

中国などからきた外国の曲に日本語の詩をつけたり、仏教の儀式などでお坊さんが唱える「声明」という声楽曲を、七五調のことばにして、鼓の伴奏でうたったりしたものです。

「越天楽」は、雅楽の一種です。平安の末期、これにことばをつけて歌うことが流行しました。今もよく歌われている民謡の「黒田節」は、「越天楽」が変形したものだといわれています。

※ 「声明」・・・仏をたたえたり、仏の教えをうたう仏教音楽

☆ 越天楽今様の作詞者「慈鎮和尚」ってどんな人？

平安時代の末期から鎌倉時代の初期にかけて活躍した歌人で、比叡山延暦寺のもっとも高い位についていたほどの偉いお坊さんでした。また、「愚管抄」とい歴史物語を書くなど多才な人でした。

おまけトリビア

実は、「越天楽今様」には、三番と四番もあったのです…。

3番 秋の初めに なりぬれば 今年も半ばは 過ぎにけり
わがよふけゆく 月影の かたぶく見るこそ あわれなり

4番 冬のよざむ 朝ぼらけ ちぎりし山路は 雪ふかし
心のあとは つかねども 思いやるこそ あわれなれ